

# 出穂期は平年並みの見込み！ 生育診断を実施し穂肥を施用！

## 1 穂肥時期のめやす(分施肥体系)

- 7月10日発出の生育速報から、7月17日の最新の生育調査結果をもとにしためやすとなっています。
- 日頃から草丈や茎数、葉色など生育状況を把握しておき、品種に応じて穂肥時期と施用量を決定する。

品 種	出穂期のめやす	1回目穂肥		2回目穂肥		2回合計窒素量(kg/10a)
		時 期	出穂期前日数	時 期	出穂期前日数	
こがねもち	7/29頃	7/12～7/15頃	18～15	7/20頃	10	1～3
コシヒカリ (平坦地) (中山間地)	8/2頃	7/16～7/18頃	18～15	7/24頃	10	1～3
	8/9頃	7/22～7/25頃		7/30頃		
にじのきらめき	8/6頃	7/7～7/12頃	30～25	7/23頃	14	2～5
みずほの輝き	8/10頃	7/16頃	25	7/27頃	14	3
新之助	8/7頃	7/17～7/20頃	21～18	7/26～7/28頃	12～10	0.5～3

※ 5月10～15日頃に移植した稚苗、5月15～20日頃に移植した中苗を想定

## 2 コシヒカリの生育診断

- 1回目穂肥前に幼穂長や葉の出方を確認し、出穂期前日数を確認する。2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用する。
- 全量基肥肥料に含まれる緩効性肥料は土壌水分が不足すると窒素成分が溶出しにくくなるので、土壌水分の保持に努める。

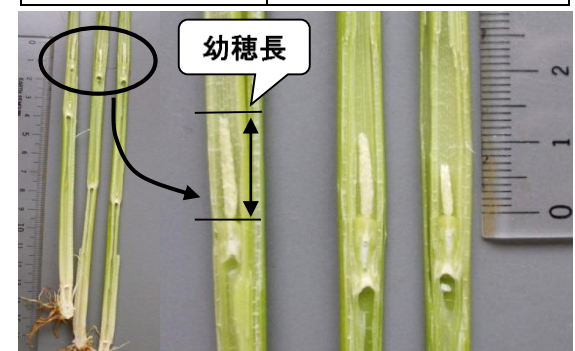
### (1) 1回目穂肥の診断めやす(出穂24日前頃)

草丈	葉色(単葉)	SPAD値 34～32 葉色板 4.2～3.9	SPAD値 35以上 葉色板 4.4以上
	70～75cm以内		時期・量とも基準どおり施用 →出穂18日前：1.0kg/10a
75～80cm以内		施用量を減らす →出穂18日前：0.5～0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂15日前：0.5～0.8kg/10a
80cm以上		施用できない	施用できない

幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2～0.4	20日
0.5～1.0	18日
4～6	12日
8～11	10日

### (2) 2回目穂肥の診断めやす(出穂12日前頃)

出穂14～12日前の葉色(単葉)	2回目の穂肥量(10a当たり)
SPAD値 32～34 (葉色板 4.2～4.5)	基準量どおり施用 (1.0～1.5kg)
SPAD値 35以上 (葉色板 4.6以上)	施用量を減らす (0.7～1.0kg未満)



【幼穂長と出穂前日数のめやす】

### (3) 出穂期10日前以降の穂肥(3回目)の対応

- 登熟期間が高温と予想され、葉色が薄い場合は、以下を参考に3回目穂肥を検討する。

施肥体系(基肥+穂肥)	判断時期	葉色のめやす	施用時期	施用窒素量(kg/10a)	施用する肥料
慣行栽培(化学肥料体系)	出穂期3日前の葉色	SPAD値 31以下 葉色板 4.0以下※	出穂期3日前	1.0kg/10aを上限	化学肥料
特別栽培(減化学肥料体系)	出穂期6日前の葉色	SPAD値 33以下 葉色板 4.5以下※	出穂期3日前	1.0kg/10a程度	有機50%肥料

※単葉の測定値

### (4) 全量基肥施肥(一発肥料)の対応

- コシヒカリでは、出穂後に高温が予想される場合、葉色の推移に注意し、出穂期の葉色(SPAD値)が32～33を下回ると予想される場合には、出穂期10日前までに追肥する。

## 3 斑点米カメムシ類による斑点米発生防止

- 斑点米カメムシ類の多くは出穂したイネ科雑草を好むので、種子が結実しない間隔で草刈りする。
- 薬剤防除の場合、剤型(粉剤、液剤、粒剤等)により散布適期が異なるので、剤型に応じた適期に散布する。
- 斑点米常発地で共同防除より出穂期が10日以上早い品種では、共同防除前の追加防除が有効である。

主な斑点米カメムシ類



アカヒゲホソミドリカスミカメ



アカスジカスミカメ



オオトゲシラホシカメムシ



ホソハリカメムシ



クモハリカメムシ

[出典：新潟県農業総合研究所作物研究センター]